

おうめじまん

04



ワークショップが新たな発見・気づきの場に

令和6年7月6日(土)、新たな文化複合施設を考える市民ワークショップの第4回が開催されました。今回はいつものようなグループワークではなく、「敷地歩き&専門家レクチャー」を行いました。

冒頭では市議会の資料をもとに配置計画や整備スケジュールのイメージについて皆さんに説明しました。「想像以上に開館までの期間が長いなあ…」という声があがった一方で、「青梅のまちづくりの核となる大プロジェクトに計画段階から関われるのは貴重な機会」といったコメントもいただきました。

本ワークショップで出された意見や本年度策定する整備基本計画は、文化複合施設の検討を進めるにあたって大切な土台となります。10年後、20年後へ確実にバトンをつないでいくためにも、いま！青梅の文化や今後のまちづくりについて丁寧に考えることが求められます。オープンまで長い年月はかかりますが、文化の香り豊かな青梅をつくるために一丸となって進んでいきましょう！

PART.1 敷地歩き

敷地歩きでは、立地や規模感を把握するだけでなく、敷地からの眺望を実際に見ながら、「どこにどんな風に配置すると眺めを活かせる?」「青梅の良さを活かしたオンリーワンの文化施設は?」といったことを考えていただきました。次回の模型ワークショップでどんな斬新なアイデアが出てくるのか今から楽しみです！



PART.2 専門家レクチャー

そして、敷地歩きのあとは、昭和音楽大学客員教授の古橋祐さんの講演会を開催しました。これまで、「文化施設」「文化・芸術」「アート」「子ども」といった視点で話し合いを行ってきましたが、「劇場などの文化施設ってどんな役割をもつのか」、「文化・アートが持つ力ってなんだろう…」といった素朴な疑問を持っていた方もいたかと思います。

今回、国内外の先進事例とともに詳しくご説明いただいたことで、今後のグループワークのアイデアの種となったのではないのでしょうか？次回の専門家レクチャー第2弾では、建築家の三浦文典氏をお招きし、文化施設計画や劇場設計についてお話をいただきます。



参加者の声

現地に行ってみないとわからない事とかがあって楽しかったです！（駅から近いとか）
専門家レクチャーの話もたのしかったです。

敷地や施設について考えたり、見てきた後に古橋先生から実際の公演や活動の様子を見せていただいたことで、機能的であることはもちろんですが、楽しさや感動といった心理的な劇場の良さを再認識することができ大変満足でした。

普段通学で敷地の近くを通りますが、行ったことのない奥まで行って、青梅全体を見わたせてとても素敵だなと思いました！

古橋先生の授業に感動しました。今世界史を勉強していて、建物の歴史もたくさん知れておもしろかったです。

現地を見学して新文化複合施設への期待が大きくワクワク感がわいて来ました。



専門家レクチャーの
概要は裏面へ！

「劇場」は「人」が作り、「劇場」が「人」を作る

～アートマネジメントの視点から～

古橋 祐

早稲田大学理工学部電気工学科・建築学科卒業、同修士課程修了。古橋建築事務所所長、一級建築士。

専門は劇場建築計画、建築デザイン。建築設計活動の他、劇場コンサルティング業務に従事、公共団体の劇場計画策定委員等を努める。現在も合唱団のメンバーとして活動中。(昭和音楽大学 HP より)

Prologue アートマネジメント

近年、アートマネジメントという言葉をよく耳にするかと思いますが、これは文化複合施設の整備・運営にあたってとても大切な視点です。「施設をつくるだけ」では、青梅の文化振興やまちづくりにつなげることはできません。古橋さんはアートマネジメントについて以下のとおり説明されていました。

アートマネジメントの仕事とは、「芸術を自由に表現できる環境を整える」ことであり、つまりは「芸術と感動を社会に届ける、芸術で社会をつなぐ」ことです。

具体的には、プロデュース／アーティストマネジメント／芸術文化団体の運営・支援／芸術文化施設（劇場・ホール・美術館等）の建設／文化政策など、仕事の内容は多岐にわたります。



第1章 「劇場」は「人」が作る

第1章では、劇場の歴史や近年の文化施設の潮流についてお話いただきました。かつては芸術家、芸術愛好家のための劇場が多く建てられましたが、近年は、主役が「市民・地域」へと変化し、開かれた施設づくりにシフトしています。事例として2022年にオープンした水戸市民会館の共用部を市民や子どもたちが自由に使っている様子をご紹介いただきました。

さらに、昭和音楽大学内の2つのホールで行われている学生プロデュース公演のお話もいただきました。"芸術"の力を信じ、戦争や歴史などさまざまなテーマの公演が展開されていました。劇場・ホールでどんな活動が行われるかによってその場所が持つ意味は変わります。つまり、「劇場」は「人」が作るということなのです。

第2章 「劇場」が「人」を作る

第2章は、アウトリーチ（Outreach）をテーマにお話いただきました。アウトリーチとは、「手を差し伸べる」と／さまざまな形で、必要な人に必要なサービスと情報を届けることです。

事例として、学校への出張コンサートやコロナ禍に昭和音楽大学の学生が制作した新百合ヶ丘のオリジナルPVについてご紹介いただきました。「劇場」から地域へ出向き、さまざまな活動を働きかけることで、人々のつながりを構築することができます。青梅でもそんな施設を作りたいですね！

Epilogue 「Space」から「Place」へ

最後は、「居場所（Place）」としての劇場のあり方についてです。第1章でも説明があったように、近年は劇場・文化施設の役割が変化しており、「市民が主役になれる」「だれもが自分らしくいられる」ことが大切な視点です。

そして、古橋さんからは「青梅の文化複合施設も、誰のための施設となるのかこのワークショップの場で丁寧に考えるべき。」と気が引き締まるようなお言葉も。今回の専門家レクチャーで学んだこと、感じたことを、次回以降のワークショップでぜひ発散していただけると幸いです。

居場所

活動の足場 安心できる場所
出会いがある場所
仲間が集う場所 よりどころ

≡

文化の拠点

≡

帰属感

だれもが自分らしく
いられる場所

